融合研究グループの成果の概要

融合研究は、基礎系と実践系心理学の融合を目指して推進された課題である。
拠点内公募により採択されたチームの平成17年度の研究成果を簡潔にまとめた。

「共感的対話」における相互作用性に関する多角的研究 －臨床心理学・認知心理学・社会心理学の立場から－

教育学研究科 桑原知子、吉川左紀子
人間環境学研究科 渡部 幹

問題及び目的

「共感的対話」の中ではなにがおこっているのだろうか？

臨床心理学の分野では、セラピストとクライアントの「対話」は、「共感的な関係性」が重要な意味を持つと言われている。しかしながら、こうした「関係性」の中身、つまり、二人の間で具体的に何が起こり、クライアントの内面にいかなる変化が生じるのかといった点についての実証的な研究はこれまでほとんどなされてこなかった。臨床心理学の分野では、こうした点についての考察がややもすれば、主観的、経験的なアプローチにとどまり、広く共有化しうる知識としては蓄積されてこなかったと言える。

本研究においては、こうした問題意識にたち、「共感的対話」の中で起こっている相互作用性に注目して、それを、臨床心理学的な観点のみならず、認知心理学的、社会心理学的な観点から多角的、実証的に研究することを目的とした。今年度は、(1)セラピスト1名と4名の大学院生、学生(クライアント役)による初回面接のロールプレイ場面の対話を4事例収録し、その発話テキストの分析を行った。とくに、当事者の主観的視点(セラピストとクライアント本人の視点)、および第三者の視点(セラピスト、クライアント以外の観察者の視点)から見たカウンセリング対話の特徴に着目して検討を行なった。

方法

1. ケースの収録

まず、分析対象となる面接場面を5ケース収録した。実際のカウンセリングではなく初回面接のロールプレイ(50分間)を行い、その発話資料を分析の対象とした。セラピスト役は臨床心理士の資格を持つ博士課程大学院生(セラピストA. 女子. 経験年数4年)、クライアント役は、修士課程大学院生2名(女子. 臨床心理学専攻. 23-24歳)と学部学生2名(女子. 20-21歳)であった。さらに、カウンセリング経験年数の長いセラピスト(セラピストB. 女子. 経験年数27年)によるロールプレイも収録した。5ケースともクライアントの主訴や性別、年齢は同一とした。ロールプレイの様子を、3台のカメラによって撮影した。映像は、セラピスト(A映像)およびクライアント(B映像)の上半身・正面約30度斜めより撮影したものと、2者の同時撮影映像(C映像)であった。これらは、2者の発話資料に加えて、発話の間、表情やジェスチャー、両者の身体運動のシンクロニー等を分析する目的で撮影された。終了後、セラピスト、クライアントに面接中の内観や、面接の満足度等についての質問紙に回答を求めた。

2. 内観の収録・対話の間の計測

カウンセリングを行ったセラピストAに、後日、C映像を提示しながら、カウンセリング中に考えたこと、感じたこと、応答の意図などを自由に発話させ、その内容をテキスト化した。セラピスト・クライアントの発話間の沈黙時間(“間”)の計測を行った。

3. 臨床家、非臨床家によるケース分析

C映像をセラピスト、クライアント以外の被験者4名(経験年数約7年の臨床心理士(臨床家)2名、臨床心理学を専攻しない院生・研究生(非臨床家)2名)に提示し、セラピストとクライアントそれぞれの心情や二人のやりとりの中で起こっている事柄を自由に語らせ(第三者の視点によるカウンセリング状況の記述)、録音した。第三者の視点は、ケースの「読み」(ケースに対する理解)の質と関係すると考えられる。臨床家と非臨床家との発言の内容や量を比較した。

結果（途中経過）

1. 臨床経験とケースの読みかた

臨床家と非臨床家では、「読み」の手がかりや質が異なる傾向がしめされた。臨床家は、クライアントの発話ばかりでなく、クライアントの表情や話し方などの非言語的行動を手がかりとしてクライアントの心的プロセスを深く推測していることが示唆された。また、非臨床家が自分の感情や過去の経験に基づく「読み」をしがちであるのに対して、臨床家はクライアントの発話や非言語的行動のみに基づいてクライアントが置かれている状況をイメージ化し、また発話内容の意味をより精緻的に解釈するのが特徴的である。

2. カウンセリング対話の“間”

セラピストとクライアントとの対話において比較的長い沈黙の時間（間）がみられた。こうした長い“間”は、通常の対話場面で出現することは稀であり、カウンセリング対話に特徴的な現象である。

考察

1. 聴く

一般に、「カウンセリング対話」においては、「聴く」ことが重要だと言われている。つまり、対話における「話す」と「聞く」の要素の中でも、「聞く」ことに重点がおかれていることになる。しかし、「聴く」は「聞く」とは異なる。今回の研究の結果から、臨床家は、相手の話を聞くときに「自分」の考えや判断から離れ、相手の話や、二人の話の「流れ」に注目していることが明らかにされた。したがって、「カウンセリング対話」は、一般の会話の中で「聞く」ことを増やせばよいというものではなく、対話の前提となる「態度」の段階で、相手と自分は異なる存在だということを深く認識し、あくまで相手の話を尊重するという「傾聴」の態度を要求するものだといえよう。

2. 読む

今回の研究において、カウンセリング場面を第三者（臨床家・非臨床家）にみせて、ケース分析をおこなわせた。これは、カウンセリング対話に関して、「セラピスト役」、「クライアント役」という対話の当事者の視点でとらえるとともに、「対話」をメタ認知的な視点からもとらえようとするものと考えられる。

一般に、カウンセリング対話においては、セラピストは、（1）クライアントの話を聴き共感すること（2）それを聴きながら自らの中で共感するとともに考えること（3）セラピスト・クライアント二人の「間」でおこっていることをメタ認知的にとらえて感じ、考えることという、三つの視点から「こころ」をはたらかせているものと思われる。そして、こうした行為の全体をさして「読む」という行動になっている。この「読む」という行為は、一般の対話とは大きく異なるものと言えらる。一般の対話では、多少の「読み」はあるとしても、相手の立場に立ちその場でおこっていることに集中した「読み」をおこなうことは、まずなされない。50分間の対話を忠実に「記録」しようとする、カウンセリングの中での「記録をつける」という行為が可能なのも、こうした集中した「読み」があるからだと考えられる。

今後の課題

カウンセリングにおける「共感的対話」は、一般の会話とは異なる特徴をもつことが示唆された。今後、50分間の面接の中で、あるいは複数回継続される面接の中で、セラピストとクライアントの「関係性」がどのように変化し、それが対話テキストの内容、発話の時間特性（発話の間など）、あるいは身体動作の同調といった行動指標にどのようにあらわれるかについても分析をおこなう予定である。

また、これまでは、訓練を受けたセラピストのみを用いたデータのみであったため、セラピストの専門性が関係性やクライアントに及ぼす効果に関して調べることができなかった。この点を詳細に検討するため、次年度は訓練を受けていないセラピスト役を用いた模擬カウンセリングケースのデータをとり、それを上記に述べた3つの分析視点から、比較検討する予定である。

[遺伝情報と意思決定に関する臨床心理学的・社会心理学的・認知心理学的研究]

(担当：伊藤・楠見)

<本課題の位置付け>

遺伝医学の発展により、病気に関与する遺伝子の研究が急速に進み、これらの知識が、就業・結婚・出産などの人生の大きな選択に影響を与えるようになってきている。しかしながら、遺伝情報に基づく意思決定には、将来の発症リスク・子孫への遺伝の確率・血縁者との共有などという遺伝情報をもつ独自の特質から生じる難しさがある。また、遺伝情報の受け取り方そのものが、知識の次元を超えた心の次元一個人の不安や人間関係の在り方などによって変化し、意思決定に影響を与えることが、遺伝医療の場におけるわれわれのこれまでの臨床心理面接を通じた実践研究において明らかにされている。

以上の点を踏まえ、本課題では、遺伝子検査や遺伝情報の告知において、個人の主体的な意思決定が生まれるための方策を探るとともに、今後、臨床の場のみならず研究においてもますます増加していくであろう遺伝情報の取り扱いに際して、医療者や研究者が配慮しておく必要のある事項を明らかにする。

<本研究の目的>

リスクに対する感受性の個人差や感情・対人関係などに関わる個人の認知的特性が、遺伝情報の受容や意思決定にどのように影響を与えるか、臨床心理学的手法、社会心理学及び認知心理学的手法を用いて明らかにする。

<研究方法等>

遺伝情報の告知等に対する感受性の個人差や感情、意思決定に作用する要因や人間関係の在り方、意思決定に際して求められる専門的援助や人材、意思決定に関する一般的態度等について、基礎的データを得るための質問紙を作成し、調査を実施した。

本研究は、遺伝という深刻な病を想定させる状況で回答を求める必要があるため、とくに、その内容と調査対象については、これまでの遺伝医療の場での臨床心理面接から得られた知見と、意思決定に関する認知心理学研究の成果をもとに、グループでの討議を重ねて慎重に検討した。その結果、内容に関しては、特定の疾患名を明記せず、「遺伝の作用」と「重い病気」である状況を想定させる方法を用いることにした。また、調査対象も患者ではない一般大学生（私立大学と国立大学各約60名）に依頼した。今回の結果をもとに、今後、質問内容についてはさらに検討を加えて改善していくとともに、調査対象も広げていく予定である。

<結果等について>

結果については、現在、分析中であるが、質問紙に回答した者の感想からは、この質問紙が遺伝等の問題を深く考えるきっかけ与えることが示されていた。遺伝医学の急速な進歩は、将来に生じる病や障害について、人生早期に突然直面させられるという状況をもたらしているが、本研究で作成した質問紙は、個人や社会が遺伝情報を適切に受け取り共有するための準備教育にも用いられ得ることを示唆していると考えられる。

注意欠陥/多動性障害（ADHD）に関する研究

1. 目的

注意欠陥/多動性障害(ADHD)が近年大きな社会問題になっている。日本では4%程度の児童がこの障害をもつと推定されている。ADHD児では、集中力の不足、衝動性、気分の易変性、落ち着きのなさ、協調運動の障害、無秩序性などの行動上の特徴を示し、このような行動上の問題により学習障害を生じること、周囲の児童に影響を与える結果、「学級崩壊」と表現される学級内での無秩序状態の生じることなどが多数報告されている。ADHDが社会問題として注目を浴びている反面、ADHDの克服策としては児童本人や家族に対するカンセリングが中心で、ADHDに関する基礎的研究はほとんど実施されていない。ADHDと診断された児童間に見られる障害の多様性、

薬物に対する効果の多様性などから、ADHDが単一の要因により生じた障害であるとは考えられない。そこで、心理学的、臨床心理学的、神経科学的方法を組み合わせることにより、ADHDの行動学的な分類、各分類群の要因の解明をめざすとともに、ADHDを克服するための最善の方策の確立をめざす。

2. 主要メンバー

船橋新太郎 大学院人間・環境学研究科・教授（認知神経科学）（世話人）
伊藤 良子 大学院教育学研究科・教授（臨床心理学）
角野 善宏 大学院教育学研究科・助教授（臨床心理学）
板倉 昭二 大学院文学研究科・助教授（発達心理学）
吉川左紀子 大学院教育学研究科・教授（認知科学）

3. 活動記録

第1回研究会

日時：平成17年3月15日 午後3時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題：今後の進め方に関する相談

第2回研究会

日時：平成17年3月31日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：西澤伸太郎（大学院教育学研究科・院生）
「具体的な事例の紹介と討論」

第3回研究会

日時：平成17年4月12日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：高嶋雄介（大学院教育学研究科・院生）
「具体的な事例の紹介と討論」

第4回研究会

日時：平成17年5月24日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：船橋新太郎（大学院人間・環境学研究科・教授）
「ADHD、前頭前野、ドーパミン」

第5回研究会

日時：平成17年6月15日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：板倉昭二（大学院文学研究科・助教授）
「こどもの発達と認知機能」

第6回研究会

日時：平成17年6月29日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：楠本伸枝（えじそんくらぶ奈良『ポップコーン』・代表）
「具体的な事例の紹介と討論」

第7回研究会

日時：平成17年10月12日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：植田有美子（大学院教育学研究科・院生）
「具体的な事例の紹介と討論」

第8回研究会

日時：平成17年11月2日 午後7時より
場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室
話題提供者：小松晃子（京都市教育委員会総合育成支援課・指導主事）
「ADHD児童の学校での取り組み」

第9回研究会

日時：平成17年11月30日 午後7時より

場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室

話題提供者：澤本伸克（京都大学ナノメディシン融合教育ユニット・助手）

「目的指向的な行動におけるドーパミンの役割」

第10回研究会

日時：平成17年11月30日 午後7時より

場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室

話題提供者：酒井律子（大学院教育学研究科・院生）

「具体的な事例の紹介と討論」

第11回研究会

日時：平成18年3月1日 午後7時より

場所：京都大学文学部東館3階 第3実習室

話題提供者：杉本八郎（大学院薬学研究科・教授）

「治療薬の開発はどのように行われるか：アルツハイマー病治療薬『アリセプト』開発を例に」

4. 成果報告

初年度であることから、まずADHD児の具体的な事例をもとに、どのような行動上の問題、認知機能に関する問題があるのかの検討に主眼をおいた。そのため、研究会を開催し、ADHD児やそれに類する児童のカウンセリングに直接関わっている院生からの事例報告、自らADHD児をもつと同時に、ADHD児をもつ家庭の相談に関わっているNPO法人えじそんクラブ奈良『ポップユーン』代表の楠本さんからの具体的な事例の紹介や行動上、精神的な問題点の報告、さらに、京都市教育委員会指導主事の小松さんから、学校のクラスにおけるADHD児の対応やクラスにADHD児をもつ教員への指導など、学校現場での問題点に関する報告を受けた。これらをもとに、ADHD児自身のこころの問題、家庭内や学校、社会における問題を明らかにしようと試みた。次年度は、今回明らかになった事柄をもとに、船橋が実施しているADHDの動物モデルによる研究や、板倉が実施しているこどもの発達に伴う認知機能の変化や多様性の研究の成果を、カウンセリングを中心とした臨床心理学的アプローチに生かせる方策を考え、ADHD児に対する有効な克服法を提案できるようにしたい。

「質的心理学とアクションリサーチの方法論」

メンバー：やまだ（リーダー）、杉万、藤田、子安、遠藤

本融合研究は、下記の2つの観点から、心理学研究の新しい理論的・方法論的提案をすることを目的にして組織された。実際の活動は、第1部会「パーティシペーション」、第2部会「ナラティブ」、第3部会「フィールド」という3部会を組織して、COEメンバー以外の研究者も加えて推進してきた。

本融合研究の成果は、「質的心理学とアクションリサーチ —パーティシペーション、ナラティブ、フィールド共同実践の融合的視点」というテーマで、「心理学評論」（2006年）特集号において刊行される予定である。

<目的>

- 1) 質的心理学の理論的研究（認識論の変革によるナラティブ的転換と新しい対話的方法論の構築をめざす心理学の理論的・方法的基礎）と、アクションリサーチ（人間・社会生活のベターメントをめざす実践的・現場介入的研究）の融合を試みる。
- 2) 発達心理学における生涯発達・進化的アプローチ（時間的変化プロセスへの関心）と、社会心理学における文化・社会的アプローチ（空間的多様性への関心）の有機的融合を試みる。

質的心理学とアクションリサーチは、心理学の新しい方法論を切り拓くことが期待され、近年急速に発展しており、学際的にも国際的にも大きな注目を浴びつつある分野である。両者は、現場(フィールド)に関心を向ける点では共通しているが、理論的視座からみると、質的心理学は人が経験を主体的に意味づける意味の行為 (acts of meaning) に、アクションリサーチはベターメントに向けてのデシジョン・メイキング (decision-making) にウエートを置いてきた。方法論的視座からみると、質的心理学はフィールドの多様な相互行為プロセスや当事者の経験を入れた記述をめざし、アクションリサーチは現場(フィールド)を実践的に変革する方略を求めてきた。両者は相互に密接な関係を有し、相互促進的な機能を有する。その理論的連関を明確にし、機能的融合を促進する。また、具体的な現場(フィールド)を例にして、両者を融合した方法論的展望と新しい手法の可能性を提案する。

<第1部会 パーティシペーションー現場(フィールド)に参入して心を知る>

心理学は、物理学や化学のような物質科学とは異なり、対象に接することによって、予期するとせざるとにかかわらず、対象の行動や心理が変わり、また研究者自身の行動や心理も変化するという契機を常に孕むものである。あらゆる学問の基本とされる観察は、基本的には「見る」ことであるが、観察の対象者(人間またはその他の動物)は、研究者から「見られている」ことに気づいたとたん、その行動や心理が変化する。この状況を最もよく説明することばはパーティシペーション (participation) であり、「参加」「関与」「分有」などの訳があてられている。研究者は、対象者について研究を行おうとするとき、ほとんどの場合、好むと好まざるとに関わらず、自らを非可視的な「透明の存在」にしておくわけにはいかない。パーティシペーションとは、研究者が自らの存在や、存在すること自体がもたらす潜在的および顕在的影響力を自覚し、またそのことをある意味で逆手にとって、対象者と関わりながら研究を行うことを言うものである。このパーティシペーションが、対象者の生活や対象者をとりまく環境の改善を目標とする場合には、アクションリサーチにつながるものである。第一部会では、ヒト以外の諸動物、子どもといった対象者の研究におけるパーティシペーションの意味を以下の3つの観点から考察した。

1-1 比較認知科学におけるパーティシペーションの意味 (藤田和生・京都大学文学研究科)

1-2 ゴリラの人付け、人のゴリラ付け (山極寿一・京都大学理学研究科)

1-3 幼児教育の現場におけるパーティシペーション (子安増生・京都大学教育学研究科)

厳密な実験室的・訓練的手法は、比較認知科学において大きな成果を挙げてきたが、近年飛躍的に進歩した社会的知性の研究においては、実験者が積極的に動物とインタラクションする1種のパーティシペーション的手法が重要な意味を持っている。

1-1では、この手法による成果の一端を紹介しつつ、その限界や将来への課題について論じた。また、大学院生の堤清香と共同で、中米ニカラグアに棲むホエザル、カメルーンのオオハナジログエノン、及びゴリラを対象に、パーティシペーション実験を用いてヒトの注意状態の認識を比較している。これらの種は霊長類中での系統発生的位置と採食生態が異なるとともに、生息地により、ヒトとの関係が敵対的、中立的、あるいは協力的である。ヒトとの関係が中立的なホエザルの予備的分析では、サルを見つめるという同じ動作が、銃を持つなどの一時的な脅威によって異なる効果をもたらすことがわかった。つまりヒトの同じ動作が文脈によって異なる意味を持つことをサルは認識していることが示された。

1-2では、霊長類の野外研究の立場から、以下のことが論じられた。野生霊長類を人間の観察者に馴らして調査する方法を人付けというが、ゴリラの場合は人間がゴリラの行動のルールを守って群れに受け入れてもらうことからゴリラ付けという。類人猿に特徴的な調査方法で、観察者は類人猿と直接コミュニケーションを体験することで彼らの行動や社会についてのヒントを得ることができる。しかし、それが擬人主義に陥らないために、長期の観察によって事例を集め、実験室の心理学者と緊密な協力を結んで、仮説を慎重に検討する必要がある。

1-3では、科学における「観察の客観性」の問題について議論した後、子安・服部・郷式(2000a, b)から幼稚園での幼児の活動の日常観察のエピソード2つを事例として取り上げ、エピソードの記述にはナラティブとしての要素が不可避かつ不可欠であること、観察者がとるべきアクションがいかにあるべきかについて、戦場ジャーナリズムのメタファーからパーティシペーションの意味について考察した。

<第2部会 ナラティブー現場(フィールド)の経験を語りから質的にとらえる>

心理学に限らず多くの学問分野において、質的方法が大きな注目をあび、新しい学会の成立が相次いでいるのは、根底からもの見方をとらえ直し、人間科学を見直そうという広く深い理由がある。

科学の基本において、数量化も質的記述も両方とも科学の方法論として重要なことは自明である。質的心理学とは、単に数量化になる前の未熟なデータ、定性的データを扱う研究のことを言うのではない。

質的心理学の核には、「ナラティブ・ターン」(物語的転回)や「ナラティブ・モード」と呼ばれる、人間の経験世界をとらえる基本的認識論と、その世界に切り込む方法論と、それによって特にクローズ・アップされてくる問題群がある。そこでナラティブに焦点をしばって、その理論的な意味と、そこから見えてくる新しい研究の景観を見通し、実践的な方法論の提案を試みる。ナラティブ(語り・物語)は、語り手と聞き手の関係性によって生成される語り行為と語られた物語をさす。したがって、ナラティブ研究をする上において、語り手あるいは聞き手として現場(フィールド)にどのようにパーティシペイトするかは本質的な問いとなる。

ナラティブは、テキストとコンテクスト(文脈)という概念と深くむすびついている。生涯発達心理学は、時間軸にそって心理過程の変化プロセスを扱う学問であるが、ライフストーリー(ライフ・ナラティブ)で扱われる生涯や人生は、いつ、どこで、誰がみても同じ抽象的な時間が扱われるのではなく、社会・文化・歴史的文脈と不可分にむすびついて、出来事をどのように経験し組織するかという観点から時間が扱われる。ナラティブとは、別のことばでいえば、「経験の組織化のしかた」であるが、それが埋め込まれている文化・社会・歴史的文脈を同時に視野に入れることによって、社会心理学や文化心理学において扱われてきた問題領域と越境しあう関係になった。また、ナラティブは、物語や語り方を変えることで、経験の組織化を変革するという概念を含んでいるので、アクションリサーチとも限りなく接近するのである。

2-1 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念ーナラティブ・ターンと物語的自己ー やまだようこ(京都大学・教育学研究科)

2-2 語りにおける自己と他者、そして時間 遠藤利彦(京都大学・教育学研究科)

2-3 “人生被害”はいかに聴き取られたか?ーナラティブ実践としてのハンセン病賠償訴訟における弁護士の聴き取りプロセス 徳田治子(九州女子短期大学)

2-1では、質的心理学とは何か、それは、古典的な定性的研究や個性記述的研究とは、どのように異なるのかを明確にし、言語論的転回のと、1990年ころからのナラティブ・ターンを中心に、質的心理学が拠って立つ基礎概念を整理した。また、ナラティブ・アプローチによって、心理学の研究内容と方法がどのように変化するかを、特に物語的自己、ナラティブ・アイデンティティをもとに論じた。

2-2では、個が自らを語るふるまいの中に、自己と他者はいかに潜み、またそれは過去、現在、未来という時間軸上にいかに位置づけられ得るかについて心理学的な考究を行った。特にこれまでの語り研究を俯瞰し、そこに、自己と他者、そして時間に関わる、いかなる暗黙の前提が潜むのかを審らかにし、その妥当性を問う試みをなした。

2-3では、ハンセン病賠償訴訟における弁護士の被害聴き取りのプロセスをナラティブ実践の事例として読み込み、“人生被害”とも称された甚大な被害の歴史が弁護士によってどのように聴き取られ、また、それらのプロセスが原告となったハンセン病元患者・回復者たちの自己の捉え直しや被害回復に向けた一歩を踏み出す上でどのような役割を担ったかについて考察した。

<第3部会 アクションリサーチー現場(フィールド)の当事者と共同実践を展開する>

当事者と研究者の協同的实践によって現場のベターメントを意図するアクションリサーチにとって、質的心理学の方法 --- エスノグラフィー、インタビュー、ナラティブ、ディスコース等の記述・分析 --- は、量的方法と並んで極めて重要である。これらの方法は、アクションリサーチの一次モード(現場の過去・現在・未来を把握し、目的志向的に現場のベターメントに取り組むモード)を深化させるとともに、二次モード(一次モードの「気づかざる前提」が相対化され、次なる一次モードの下地が準備されるモード)への進展可能性を拡大する。

3-1 語りとアクションリサーチ

—— 防災ゲームをめぐる —— 矢守克也(京都大学・防災研究所)

3-2 アクションリサーチにおける質的心理学の方法によるセンスメイキング

——町村合併で翻弄された過疎地域活性化運動の再定位 東村知子（奈良女子大学）

3-3 「リサーチ・イン・アクション」としてのアクションリサーチ

——リミットケースに関する考察 杉万俊夫（京都大学・人間・環境学研究科）

アクションリサーチに軸足をおく立場から、現場の当事者と研究者の協同的实践における質的心理学の方法論的役割について、実践と理論の両方から検討を加えた。

3-1では、防災実践の現場で、過去に災害を体験した当事者と、将来の災害に備えようとする当事者とを、それぞれの防災実践についての語りを促すツール（集団ゲーム）を研究者が準備することによって、連携させようとしたアクションリサーチを実施した。

3-2では、20年来、全国的に見ても先駆的な活性化運動が展開され、ここ3年間、町村合併で翻弄された過疎地域（鳥取県智頭町）において、合併派・単独派によって発行された大量のチラシを言説分析の手法で分析し、町を二分した「混乱」（3回の住民投票ではいずれも僅差で合併が支持されつつも、最終的には町議会の合併拒否の議決によって単独路線を歩むに至った3年間に及ぶ混乱）のセンスメイキングに資するという試みを行った。その結果、両陣営が必ずしも合併・単独という表看板で単純に衝突していたわけではなく、それぞれに町のことを「自分たちで決める」ために戦っていたこと、その意味では双方にとって苦い結果に終わった論争が、それでもなお積極的な意味を持ちうる——町の規範を確実に変化させた——ことを示した。

3-3では、アクションリサーチの質的レベルアップを促す質的心理学方法の先鋭化に関して、最近の欧米における研究動向をも踏まえて、理論的に考察した。具体的には、エスノグラフィー、インタビュー、ナラティブ・アプローチ、言説分析という4つの質的方法を取り上げ、それらをフォーコー的権力作用の可視化、および、研究者と研究協力者の自覚的協同作業という観点から、いかに先鋭化しうるかを提言した。

「信頼パーソナリティの高低と対人的な信頼情報の処理過程の関連に関する研究」

研究実施者：渡部 幹・山本洋紀（人間・環境学研究科）

研究の目的

本研究が目的としたのは、これまで注目されていなかった、信頼パーソナリティと信頼性情報の処理過程との関連についてである。

見知らぬ他者への信頼は、社会的交換や経済交換を行う際に不可欠であるとされる。信頼がなければ、我々は新しい相手と交換関係を結ぶことができなくなる。人間が他の霊長類とは異なり、これだけ大規模で複雑な相互依存システム（社会）を形成できた主要因のひとつが、「他者を信頼する能力」であることが指摘されている（Fukuyama 1995; Putnam 1993）。そして、その信頼感のレベルは、対人相互作用や経済システムのあり方と関連しており、文化や社会によって異なることが明らかになりつつある。このように、信頼は、社会や文化を形成する基礎的な心理特性と考えられるが、これまでの「信頼」と関わりのある脳生理学的な研究では、「他者から信頼される」とき、どのように脳が反応するか、という点のみが分析の対象となっており、他者への信頼を支える脳生理学上のメカニズムはまだそれほど研究されていない。

これまでの心理学での研究知見は、個々人の信頼度の高低が、さまざまな心理的特徴とセットになっており、パーソナリティとして測定可能であることを示している（山岸 1998）。中でも重要な知見として、高信頼パーソナリティの持ち主は、相手が信頼できるかどうかの情報（「信頼性情報」）に対して敏感であることが知られている（小杉・山岸 199X）。そこで本実験では、信頼性情報への反応が、どのような脳生理学的プロセスに基づいているのかについて検討することを目的とし、第一段階として、人がそのような情報に反応するときに賦活する脳部位を特定することを目指した。

関連する先行研究は少ないが、Orbitofrontal Cortex（眼窩前頭皮質）、Medial Prefrontal Cortex（前頭前野内側）、Insula（島葉）、inferior frontal sulcus（下前頭溝）、superior frontal sulcus（上前頭溝）、thalamus（視床）、inferior/superior colliculli（下丘、上丘）などが、相手から信頼され

たときに活性化するとされており、本実験においても関与が予測された。

実験

まず、112名を対象にした予備調査を行い、「信頼性情報」と「非信頼性情報」のリストを作成した。予備調査では、人物の特徴を示す情報のリストを参加者に提示し、その情報アイテムをもとに人物の信頼性を判断することを求めた。情報は、「D・Cさんは、道端のゴミをそのまま放置する」や「G・Nさんは、めがねを掛けている」というような形であり、信頼性の判断は、「信頼できない」、「どちらかと言えば信頼できない」、「どちらかと言えば信頼できる」、「信頼できる」、「判断できない」、の五択で行われた。予備調査で用いた46個の情報リストの中から、「判断できない」と選択されることが最も多かった16個を取り出し、「無関連情報」とした。さらに、「判断できない」とされることが少なく、かつ「信頼できない」と判断されることが多かった16個を取り出し、「信頼性情報」とした。

本実験には23名が参加した。実験参加者は、事前に信頼尺度（山岸 1998）に回答することによって、信頼パーソナリティ得点を測定されていた。実験実施施設に到着した参加者は、実験に関する注意と説明を受けた後、MRI装置の中に入り、装置内のプロジェクターに映し出される質問に対し、押しボタンスイッチを用いて応答した。参加者は「ある人物についての情報」として、信頼性情報もしくは無関連情報を提示される。情報は、ランダムな順序で、信頼・無関連16個ずつの計32個が提示される。そして、そのそれぞれの情報について、その人物が信頼できるかどうか、判断を下すよう求められた。判断は、「信頼できる」、「信頼できない」、「判断できない」の三択でなされた。情報の提示時間は5秒間であり、2.5秒間のインターバルを置いて次の情報が提示された。参加者は、できるだけ早く、かつ正確な判断を行うよう指示された。

結果と考察

23名の実験参加者のうち、うち2名は実験中に眠ってしまったため、分析から除外し、21名を分析対象とした。参加者の信頼パーソナリティ得点はおおむね中程度に固まっていた（ $M=4.22$, $SD=1.01$ 。「信頼できない」～「どちらでもない」～「信頼できる」という7点尺度が用いられ、得点が高いほど信頼パーソナリティが高いことを意味する）。

実験の目的が信頼性情報に対して賦活する脳部位を同定することである。そのため、実験参加者が信頼性情報に対して応答している場合と、無関連情報に対して応答している場合とで、脳活性パターンを比較した。なお、信頼性情報を提示された場合は、88%が「信頼できない」という押しボタンでの応答を示し、無関連情報を提示された場合は82%が「判断できない」と応答しており、予備実験より作成した情報リストの妥当性は本実験においても高いことが確認されている。判断にかかる時間（情報が提示されてから押しボタンを押すまでの時間）には著しいばらつきがあり（ $M=3042$ ms, $SD=1514$ ms）、取り出して分析するのは困難であるため、情報が提示されてからの6秒間を、情報に対する応答時間として分析上定義した。

応答時間における脳活性をBrainVoyager QXを用いて、信頼性情報と無関連情報で比較したところ、信頼に関する過去の脳イメージング研究とは異なる脳活動パターンが観察された。次の5部位において、無関連情報に反応しているときよりも信頼性情報に反応しているときに有意に強い賦活が認められた。Anterior cingulate sulcus ? gyrus ? (前帯状溝、回)、left frontal lobe (左前頭葉)、right frontal lobe (右前頭葉)、putamen (被殻)、そして核回である。

本研究と先行研究の相違は、信頼性に関する処理回路は単一ではなく、信頼の受動的な側面と能動的な側面で分離されていることを示唆している。先行研究において検討されていたのは、相手から「信頼される」ときに活性化する部位であった。それに対して、本実験では、相手の信頼性情報、特にネガティブな情報に対して応答する際の活性部位について調べており、これはむしろ「他者を信頼する（しない）」という側面に関するものである。この信頼の受動と能動の差異に注目した研究はこれまでなされておらず、その意味でも本実験の知見は重要であるものと考えている。今後は、高信頼パーソナリティの参加者と、低信頼パーソナリティの参加者を用い、本実験で同定された脳部位について、信頼性情報へ反応するときの活性度に、信頼パーソナリティの高低による差異が見られるのかどうかを検討していきたいと考えている。

「心の抑制過程」

メンバー：船橋新太郎，板倉昭二，角野善宏，河合俊雄（企画者），子安増生，楠見 孝，荳阪直行，齋木 潤，齊藤 智（企画者）

An Interdisciplinary Approach to "Inhibitory Processes in the Mind": A Report

Inhibition is an important concept in many areas of psychology. The frequent appearance of this term in the literature suggests that it is useful for describing a number of mental processes and that it is a key factor in understanding various human behaviors. Because current approaches to understanding inhibitory processes in the mind are diverse (including neuroscientific, developmental, clinical, and cognitive psychological approaches), it is not always clear that we mean the same thing when we talk about inhibition. It can be difficult for researchers to communicate beyond their own subdisciplines or to generalize their ideas to the broader context.

The aim of this research was to review the contribution the different disciplines have made to our understanding of inhibition, to unite recent major findings, and to share the advantages of an interdisciplinary approach to the exploration of phenomena related to inhibitory mental processes. We also attempted to create new research questions that could employ an interdisciplinary approach.

To achieve this goal, we organized a series of meetings in which guest speakers gave talks, providing a basis for discussions on the issue of inhibition; we also held an international symposium on inhibitory processes in the mind, in which distinguished invited speakers delivered presentations over four sessions (two to three speakers for each) on 14 and 15 January 2006.

In this report, we summarize what we learned from the series of "inhibition meetings," outline the important contributions made by the speakers at the international symposium, and provide a set of questions that emerged from discussions at the meetings and the symposium. This report ends by reporting three directions that research on inhibitory processes in the mind should take.

Summary of the "inhibition meetings":

M. Takahashi provided a review of research on "Inhibition and human memory" in which he discussed the relationship between forgetting and inhibition. He provided examples of recent advances in memory research in which "part-set cueing," "directed forgetting," and "retrieval practice paradigms" have been used, and attempted to apply the experimental research framework to much more practical issues, e.g., the treatment of PTSD.

In his talk titled "Unity and diversity of inhibition and interference control functions: An individual differences perspective," A. Miyake suggested that inhibition may not be a unitary construct and that it is important to be specific about what sort of inhibitory processes one has in mind. He also indicated that inhibition is a difficult construct to measure (because of task impurity) and that a promising way to overcome this problem might be to use latent variable analysis.

M. A. Lambon Ralph and K. Patterson reported on neuropsychological cases in which patients' performance on semantic processing tasks were impaired and suggested that some of these cases, particularly stroke aphasic patients who had suffered damage to the brain region involving the left temporo-parietal junction or left prefrontal cortex, demonstrated semantic impairment that seemed to reflect disruption to the inhibitory control mechanisms.

C. Jarrold's talk "Working memory and inhibitory control: Are they interacting executive functions?" reported on a developmental study, which indicated that manipulation of the working memory load interacted with that of inhibitory demand in executive task performance.

Contributions of the invited speakers at the international symposium: We summarize the main points of each presentation at the symposium here.

- Individual differences can help us to grasp the links among neurophysiology, the ability to suppress unwanted memory, and working memory (M. Anderson).
- Episodic memories can be inhibited, but some traces are witnessed in reaction times (M. Conway).
- False memories might be related to a fractionation of chunked stored memories (M. Takahashi).

- Analysis of disinhibited responses to trauma have indicated a subtle interplay between suppression and activation: creative and dissociative responses (J. Beebe and K. Okano).
- Inhibition or suppression of verbally irrelevant intrusions appears to be active and it is not just a matter of decay (M. Gernsbacher).
- Neurophysiological evidence suggests that a variety of localized regions of the prefrontal cortex are linked as tasks shift in space and time (S. Konishi).
- Evidence suggests that ordered sequences of development, and at times their performance, are abulic (P. Zelazo).
- Inhibition as a developmental construct must be understood as a diverse construct (e.g., delay of gratification and conflict inhibition), which relates to other skills in social understanding and pretense (S. Carlson).
- C. Lewis provided these summaries and discussions at the final stage of the symposium.

Questions that emerged from the discussions: Two sets of important questions were repeatedly raised. One was regarding the concept/definition of inhibition (when we talk about inhibition, are we talking about the same phenomenon?) and another relating to frameworks of inhibition research (e.g., can we theorize about inhibition without a deeper framework, which includes action, disinhibition, and agency or epistemic flow? Or, although there are the different levels of analysis, such as brain activity, developmental tests, and experiments on adult and clinical narratives, can these be reconciled?). There were also some questions regarding methodological paradigms. For example, are researchers bounded by particular procedures in which they confuse the method with the underlying constructs? Are clinicians bounded by the lens of their discipline? (e.g., Beebe on creativity and Okano on “positive” symptoms that are really negative).

Future directions of research on inhibitory processes in the mind: To answer the above questions, we need to advance in the following three directions.

First, the problem of defining inhibition is clearly related to the task-impurity problem, which provides us with another question, namely, how do we measure inhibitory processes and related skills? One of the most promising strategies to handle this question might be to use structural equation modeling, which could overcome the task-impurity problem. A second obvious direction we need to take in order to make theoretical advances is to enhance the links among disciplines. We have already found some successful links and related questions, for example, between neurophysiology and cognitive psychology (are Konishi’s fascinating dissociations across trials and types of shift a product of strategies, use of language, working memory, or a suppression mechanism?) and between clinical accounts and cognitive data (Think, No-think tasks in depressive patients over time or treatments). A third direction for research, to enable a broadening of the theoretical framework, is to explore the role of social processes and social factors in inhibition. More specifically, the influences of children’s interactions and culture on inhibition might provide the best cases for future investigation.